

富士山

概況(平成15年9月)

火山活動は、落ち着いた状態が続きました。

高周波地震、低周波地震の回数はともに少ない状態で、火山性微動は観測されませんでした。東北東山腹の標高1,530m付近に地面の陥没とごく弱い噴気が確認されました。

地震活動の状況

山頂に設置した地震計の記録によると、高周波地震、低周波地震の回数はともに少ない状態です(表1)。2000年後半から2001年前半にかけてやや活発化した低周波地震活動も、その後は落ち着いた状態が続いています(図1~5)。火山性微動は観測されませんでした。

表1 地震日別回数表(富士山)

上旬	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	旬計	
高周波地震	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
低周波地震	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0	4	
中旬	11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	旬計	
高周波地震	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	
低周波地震	6	5	0	4	0	3	0	0	0	0	18	
下旬	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	旬計	月計
高周波地震	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
低周波地震	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	23

短期・日別 地震活動推移 (最近2年間の高周波地震・低周波地震の日別回数)

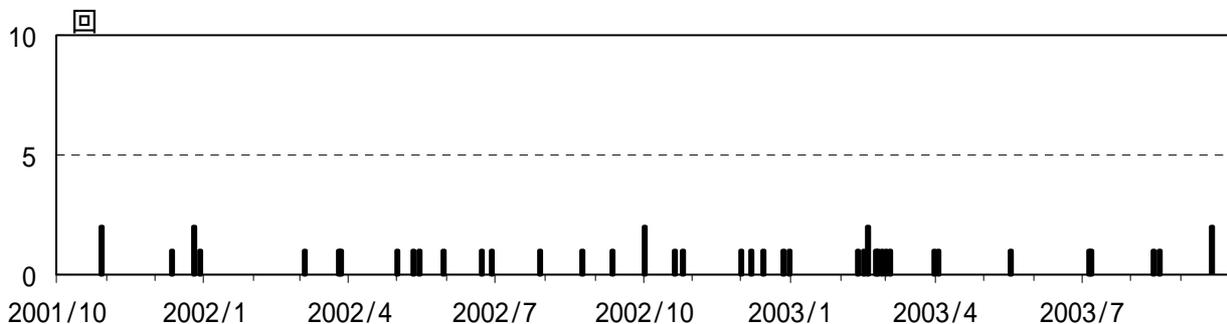


図1 富士山 高周波地震日別回数(2001年10月1日~2003年9月30日)

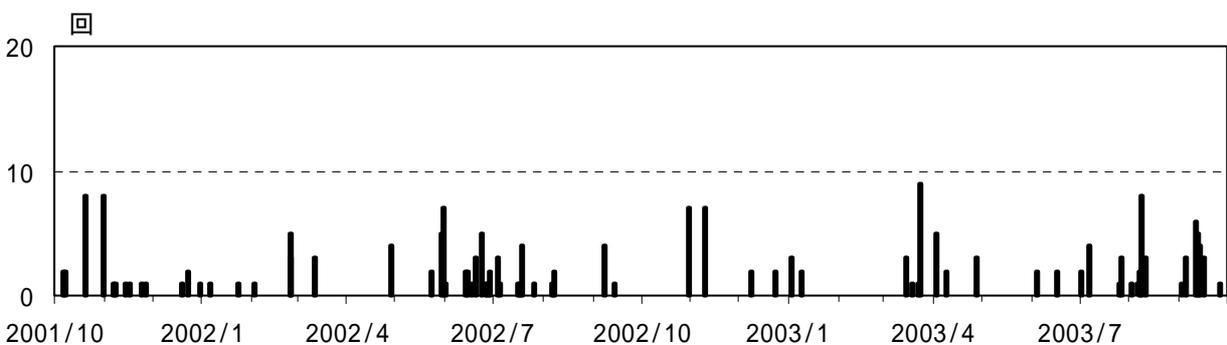


図2 富士山 低周波地震日別回数(2001年10月1日~2003年9月30日)

長期・月別 地震活動推移 (1995年6月以降の高周波地震・低周波地震の月別回数)

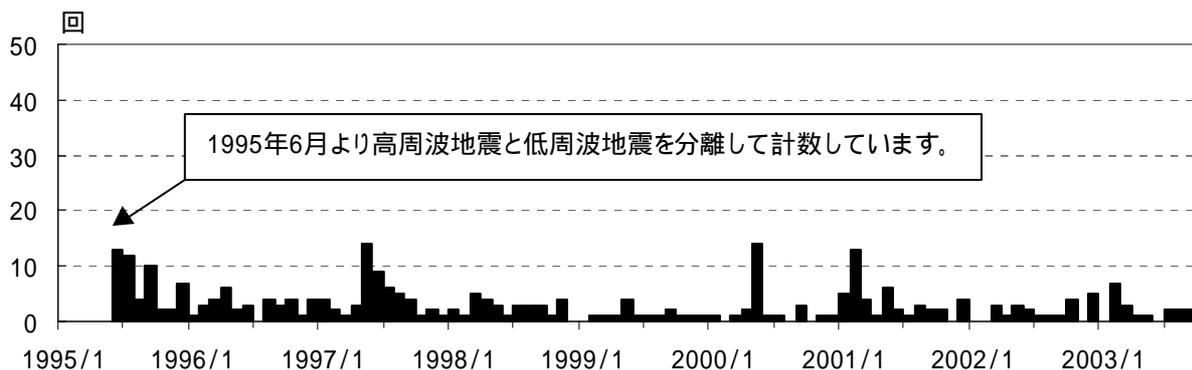


図3 富士山 高周波地震月別回数(1995年6月～2003年9月)

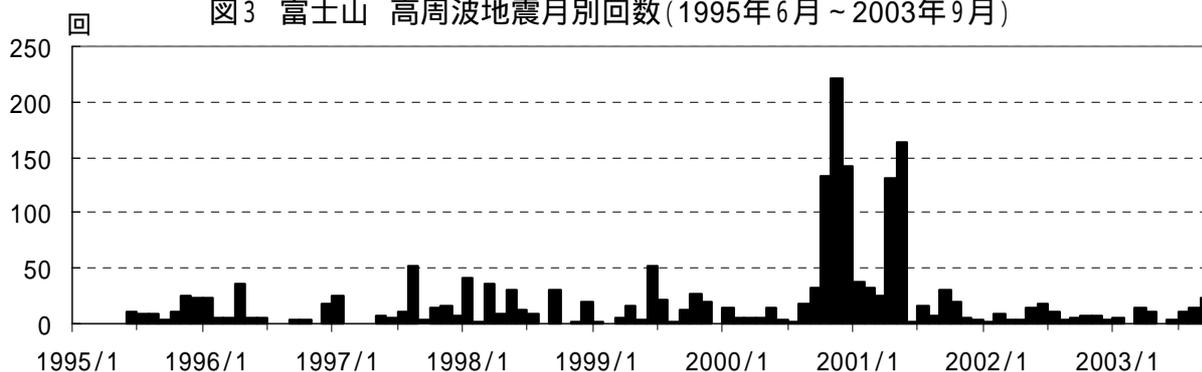


図4 富士山 低周波地震月別回数(1995年6月～2003年9月)

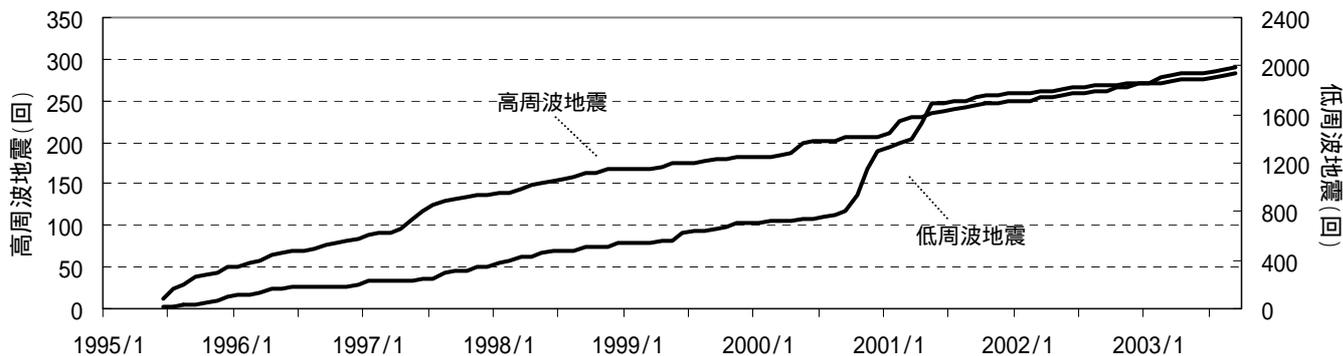


図5 富士山 地震積算回数(1995年6月～2003年9月)



山腹の地面の陥没と噴気

9月18日に、山梨県に「富士山北東斜面で噴気が出ている」との発見者通報がありました。その情報を受けて、気象庁では、9月22日と30日に職員を現地に派遣し、状況を調査しました。結果は以下のとおりです。

- 22日の調査で、富士山の東北東斜面、標高1530m付近の林道脇で、東西約15m、南北約10mの楕円形をした深さ20~30cmの地面の陥没を確認し、そこから南東に約400m離れた地域にも、直径約5mのほぼ円形で深さ30~40cmの地面の陥没を3ヶ所で確認しました(図6、7)。30日の観測では、それらの形状に変化はなく、新たな陥没も確認されませんでした。

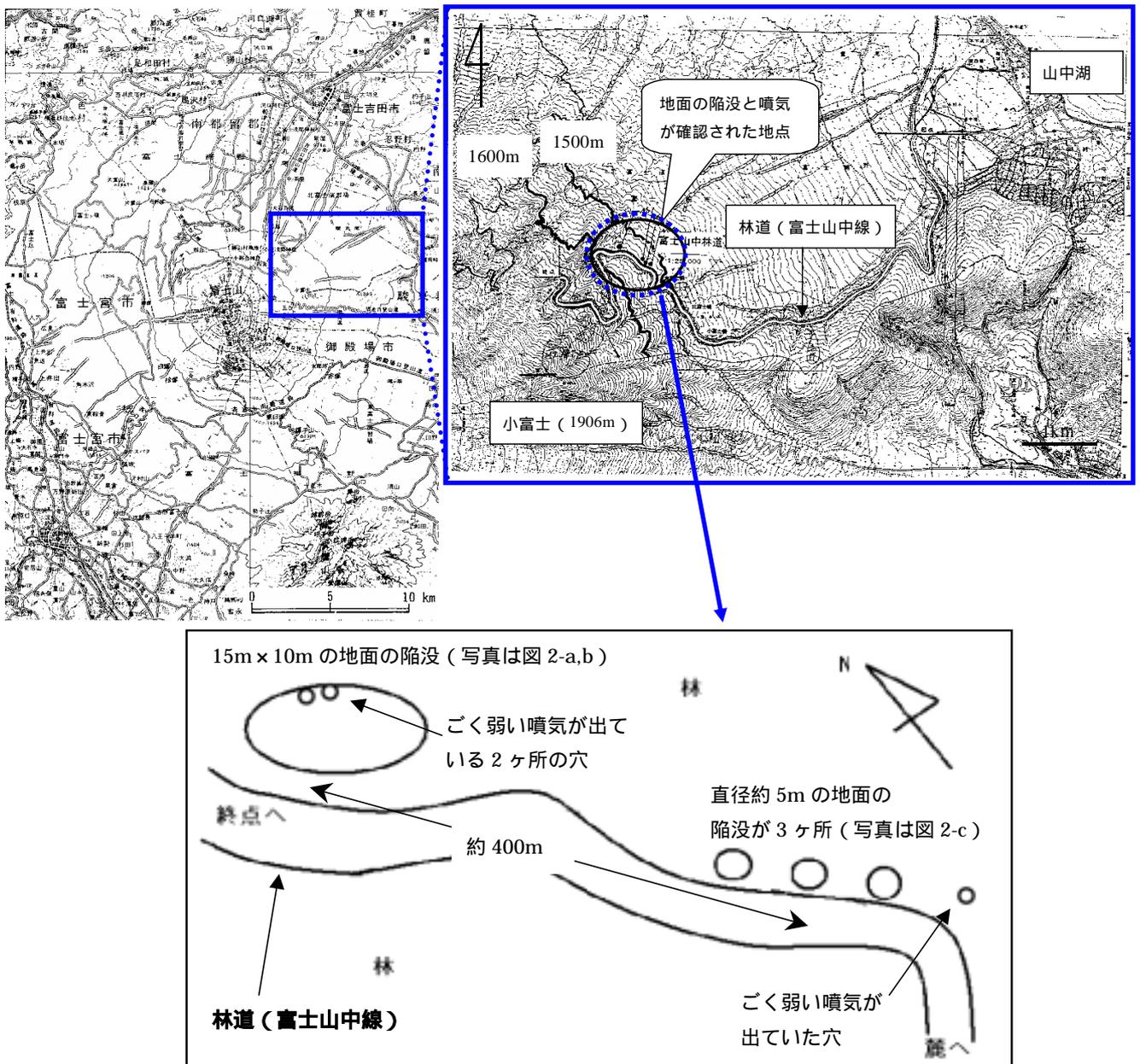


図6 地面の陥没と噴気の観測された位置

左上 国土地理院 1/200,000 地形図「甲府」及び「静岡」より

右上 国土地理院 1/25,000 地形図「須走」に山梨県消防防災課が加筆した資料より

下 地面の陥没と噴気孔の位置関係

2. 最大の陥没の陥没壁に沿った北側内側の数ヶ所に穴があり、内2ヶ所でごく弱い噴気が確認されました(図6、7)。噴気の温度は22日の観測では最高で41 でしたが、その後30日までの連続観測では30~40 で大きな変化はありませんでした。離れた地点にもごく弱い噴気を出す穴がありましたが、30日の観測ではそこから噴気は確認されませんでした(図6)。いずれの噴気の高さも地表上1m以下のごく弱いものでした。



図7 最大の陥没(左)と噴気孔(右)(22日撮影) 噴気口の周りには白いものは菌類と思われる

3. 22日の観測では、いずれの場所でも硫化水素等の顕著な火山性のガスは検出されませんでした。また、25日に産業総合研究所地質調査総合センターの行った観測でも、顕著な火山性のガスは検出されませんでした。

現時点で、地震活動等他の観測データに異常な変化は観測されておらず、これらの地面の陥没や噴気が噴火活動と直接関連するものとは考えていません。

なお、富士山頂付近の荒巻(図8)では、1970年代まで噴気と地熱活動がみられていました。



図8 富士山頂付近